

CHANCE MAKER プログラム 事業評価レポート

Living in Peace こどもプロジェクトは2010年12月より寄付プログラム「Chance Maker (チャンスメーカー)」の運営を開始し、社会的養護施設の施設建替えを資金的に支援してきました（寄付総額66,340,000円、月次寄付者数603名 ※ともに2017年10月末時点）。

本レポートでは、第一支援先である筑波愛児園（2014年1月竣工）と第二支援先である鳥取こども学園希望館（2015年6月竣工）の二施設について、施設建替えが養育環境にもたらした影響を、施設職員へのインタビューにもとづいて考察・評価し、その概要を記述しています。

なお、インタビューは本年の8月（筑波愛児園）と9月（鳥取こども学園希望館）に実施しています。

Living in Peace こどもプロジェクト R&D グループ

2017年11月

1. 筑波愛児園の施設小規模化

■筑波愛児園について

筑波愛児園（以下、「愛児園」）は、1973年に設立し、茨城県つくば市にある本体施設とそこから少し離れた地域小規模施設1ヶ所からなる児童養護施設です。筑波愛児園は以下を養育理念として、子どもたちの養育に取り組んでいます。

【筑波愛児園の養育理念】

- ① 個人の意志の尊重
- ② 発達の援助
- ③ 養護の継続と自立支援

■筑波愛児園の建替えについて

筑波愛児園の建替えでは、中舎規模の施設一棟から小舎規模のユニット6カ所（6名ユニット2カ所、7名ユニット4カ所）への移転・改築を行いました。施設の小規模化に伴い、国・地方公共団体からの補助金が増加し、生活担当職員（ケアワーカー）の数が増加しています。さらに親子生活訓練棟の新設により、子どもの入所後も親子の関係を修復維持するための、親子宿泊が実施できるようになりました。

旧舎は建物全体が老朽化しており、一部には2011年の東日本大震災によって生じた損傷も見られましたが、建替え後は耐震性等で安全性の高い生活環境を実現しています。

建替え前の筑波愛児園



写真 1. 施設全景

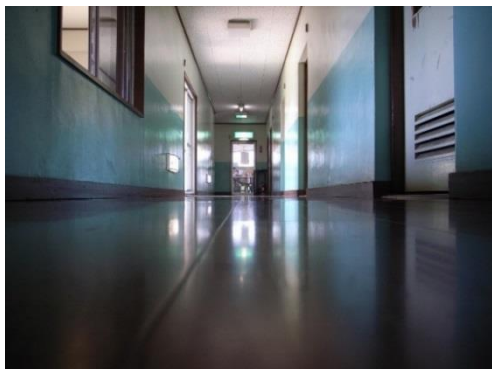


写真 2. 廊下



写真 3 震災で損傷した壁

建替え後の筑波愛児園



写真 4. 施設全景



写真 5. 親子生活訓練棟



写真 6. 生活ユニットのキッチン



写真 7. 個室

■建替えの影響について

1. 子どもの個室ができたことによる影響

建替え前には複数名が一部屋で暮らしていましたが、建替え後には子どもたちの個室ができました。

個室ができたことにより、子どもが好きな時に落ち着いて過ごせるようになりました。また個室にいるときに子どもが、家族のことや自分の悩みなどの個人的な話を職員とできるようになりました。個室が子どもにとっての居場所となっていることが分かります。

しかし一方で、個室に入ることで職員と距離を置こうとする子どもに対しては、子どもとの距離を縮めるためのより高度なコミュニケーション能力が職員に求められるようになりました。

2. 生活が少人数化したことによる影響

A. 人間関係の変化

(a) 職員と子どもの関係

生活ユニットの少人数化によって、職員一人が子ども一人により長い時間かかわれるようになりました。職員が子どもと遊んだり、子どもの成長に立ち会えたりする機会が増え、子どもの側でも、以前は大人数のなかで我慢していたような要望を職員に伝えられるようになりました。

子どもは、時にわざと大人を困らせる行動をとることで大人の愛情を確かめます。それを「試し行動」と呼びますが、小規模化によって子どもたちの「試し行動」も増えています。「試し行動」は虐待経験を持つ子どもに見られる傾向があり、大人を信頼できない子どもが再び大人と信頼関係を築くために必要な通過点と考えられています。

(b) 子ども同士の関係

建替え前はたくさんの子どもの一緒に生活していたために、遊びも施設のなかで完結してしまい、子どもたちは施設に閉じこもりがちでした。しかし小規模化によって施設内でのつながりが限定的になり、施設外の子どもたちと積極的につながりを持てるようになりました。また施設には、感情のコントロールが難しいなど発達的な特性のある子どもも生活していますが、少人数の生活ユニットではそのような子どもが重ならないような調整もしやすくなりました。その結果、子どもたちの一人ひとりが落ち着いて過ごせる環境になっています。

しかし一方で、建替えの直後には、それまでたくさんいた話し相手が減り、さみしがる子どもも見られました。

B. 生活ユニットの独立化

建替え以前は、施設全体で守らなければいけない生活のルールがありました。しかし建替

え後は生活ユニットごとにゲームの時間を設けるなど、より小さな生活単位で柔軟にルールを決められるようになりました。結果として、子どもが自由に行動できる幅が広がっています。また生活ユニットごとの個性や特色も、よりはっきりとしたものになってきました。

しかし一方で、各生活ユニットが空間的に独立しているために、職員が他のユニットの様子が把握することは以前よりも困難になっています。

C. 生活ユニット職員の業務の変化

生活ユニットが少人数になり、一人の子どもに関われる時間が増えたことで、生活ユニットの職員は一人ひとりの子どもを深く理解し、その子に合った養育を行いやすくなりました。また、食後の洗いものや子どもたち一人ひとりの記録といった業務の量も、子どもの数が減ったことで少なくなりました。

しかし一方で、以前より増した子どもからの要望や「試し行動」への対応では、職員の経験やスキルがいつそう求められています。

3. その他の影響

施設での生活が長い子どもの場合は、料理や洗濯等の家事を学ぶことが自立のために重要です。新しい愛児園では、すべての生活ユニットにキッチンが整備されています。また子どもたちの日々の食事が作られる調理室も、子どもが気軽に立ち寄れる場所に作られています。結果的に、子どもたちが生活のなかで食材に触れ、調理の経験をできる機会が増えています。

■建替えの影響のまとめ

今回の建替えによって、子どもたちの生活は落ち着いたものになりました。また、職員と過ごせる時間が長くなり、自分の個室で個人的な話もできるようになって、子どもたちは職員とより深い愛着関係を築けるようになりました。また、施設外の友人との付き合いが増えたことに加え、生活のルールが減って外出が容易になったことで、施設外へと積極的に関わっていけるようになりました。

職員は、ケア以外の業務量の減少により、子どもとより多くの時間を過ごすなかで子どもを理解し、一人ひとりに合わせた個別的なケアを行いやすくなりました。一方で、生活ユニットの独立化により他の施設職員との情報共有が行いづらくなかで、子どもの「試し行動」などに対応しなければならない機会も増え、求められるスキルはより高度になっています。

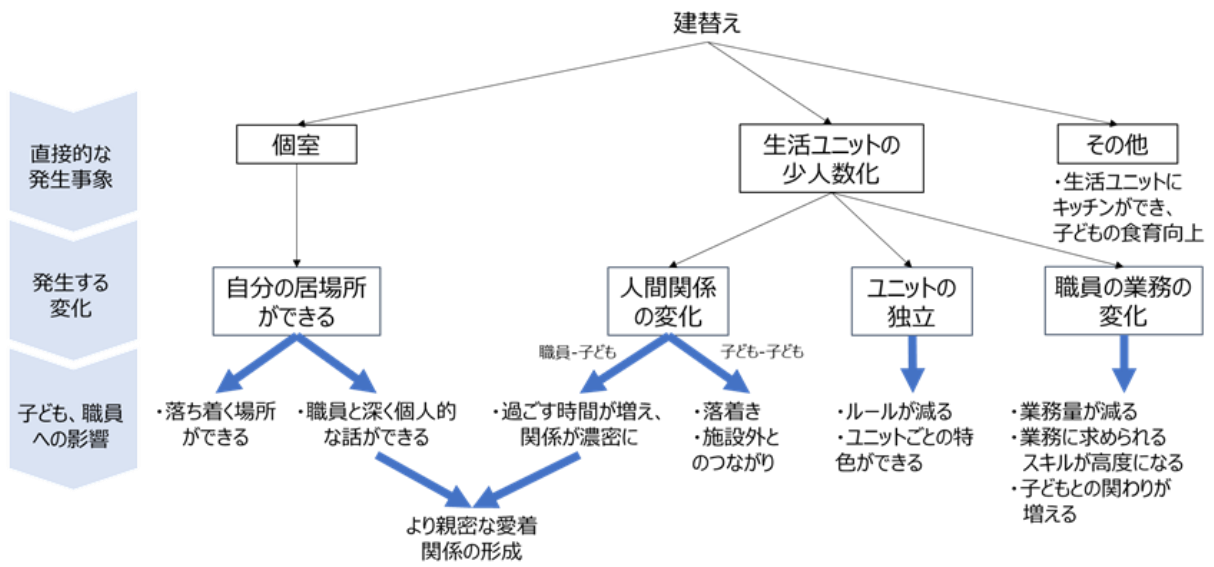


図 1. 建替えの影響（愛児園）

※インタビューをもとに Living in Peace 作成

2. 鳥取こども学園希望館の建替え

■希望館について

鳥取こども学園希望館（以下、「希望館」）は、1994年の開設より、一貫して小舎制養育（小規模グループケア）を実践してきた児童心理治療施設です。その母体である鳥取こども学園（鳥取県鳥取市）は、1906年に尾崎信太郎らがキリスト教の精神に基づいて設立した社会福祉法人であり、2017年には111周年を迎えています。その歩みは「子ども一人ひとりのありのままを受容し、子ども一人ひとりのかけがえのない命をはぐくみ、育てる」という法人の理念のとおり、「子どもの権利擁護」と真摯に向き合ってきた歴史でもあり、現在は、乳児院、児童養護施設、児童心理治療施設だけでなく、里親支援、地域支援、自立・就労支援、学術研究まで幅広く、支援の領域を広げています。

■児童心理治療施設について

児童心理治療施設（旧称、情緒障害児短期治療施設）とは、心理的・精神的な問題で日常生活に困難を抱えている子どもたちに、生活を基盤とする心理治療を行うための施設で、全国に46施設あり、約1400名の子どもが入所しています（H28時点）。

社会的養護のなかでも入所児に対して被虐待児が占める割合は大きく、4人に3人の子どもが虐待を経験しています（児童養護施設の場合は、およそ2人に1人の割合）。また、入所児の心理的・精神的な問題には、広汎性発達障害（26%）、軽度・中度の知的な課題（12.8%）などがあり、40%の子どもは児童精神科を受診しており、35%の子どもが薬物治療を行っています。

■希望館の養育方針について

希望館は、児童心理的治療施設として精神科医やセラピストによる心理治療の体制を充実させつつ、とくに日常の生活のなかでの子どもとの関わりを重視して、総合環境療法による子どもたちの治療（「生活のなかでの治療」）を目指してきました。それは、法人全体の理念である「子どもの最善の利益」を実現するものとして、まず第一に、家庭的な環境と、養育者による献身的な関わりがあると考えてきたからです。そのため希望館は、入所部門のある児童心理治療施設としては全国的にもめずらしく、3~4名の職員と6~7名の子どもがひとつの生活単位（ユニット）として、職員が子どもの成長を見守るという小舎制養育（小規模グループケア）を一貫して採用してきました。

深刻な虐待を経験している子どもも多い希望館では、家庭的な雰囲気の中で、職員が子どもに対して日々ていねいに関わっていくことで、子どもは「自分は大事にされている」と思えるようになります（職員との愛着関係の形成）。そしてそのことによって、子どもは「自分はここにいてよい」という安心を抱けるようになり、最終的にはそれが「自分は大切な存在だ」という子ども自身の自己肯定・自己受容につながります。

希望館ではこのような養育をベースに、心理治療や分校のスタッフと連携しながら、子ども一人ひとりの課題と向き合い、子どもの家庭復帰や自立に向けた取り組みをしています。

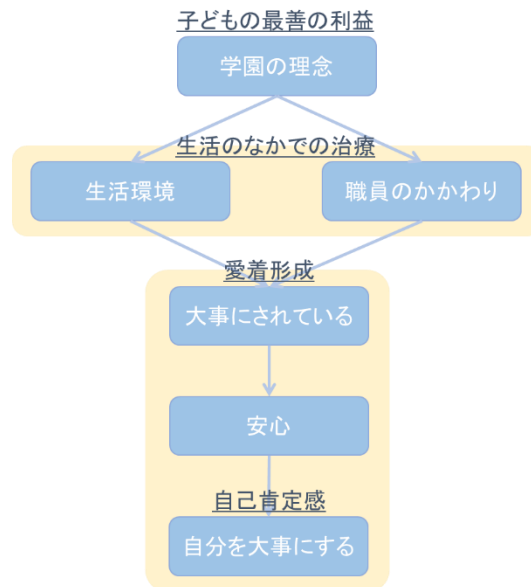


図 2. 希望館の養育方針

※インタビューをもとに Living in Peace 作成

■ 希望館の建替えについて

希望館は同学園の児童養護施設の一部を引き継いで開設されたため、建替え検討時には、築 40 年を経過した建物が地盤沈下によって傾き、雨漏りや配管の腐食といった著しい老朽化も目立っていました。あわせて旧舎は、どの子ども一棟にひとつしかない玄関から出入りし、棟内でそれぞれの居住空間に分かれるという構造だったために、居住空間どうしの境界がはっきりせず、独立した「家」という雰囲気に乏しいという課題もありました。



写真 8. 旧舎外観

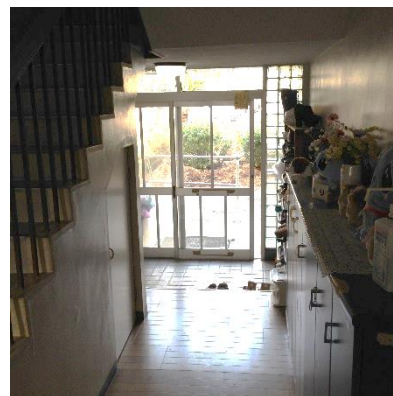


写真 9. 旧舎玄関



写真 10. 旧ユニット（廊下）



写真 11. 老朽箇所（天井）

建替えに際しては、2年の年月を費やし、過去20年ほどの実践を踏まえた「小舎制児童心理治療施設の理想形」を全職員で議論し、子どもたちの希望も取り入れながら、最終的にはプロポーザル方式によって設計・建築業者の選定を行っています。

また新舎では、旧舎の子ども7~8名からなる4ユニット体制から、子ども5~7名からなる5ユニット体制に移行し、新設されたユニットでは、入所児のより個別的なケアや退所前の自立トレーニング、あるいは非入所児の一時預かりや一時保護など、多機能性によってより多様な子どもに対応できる体制を整えています。



写真 12. 新舎外観



写真 13. 新舎玄関



写真 14. 新ユニット (リビング)



写真 15. 新ユニット (個室)

■建替えの影響について

今回の希望館の建替えによって大きく変化したことのひとつに、居住空間の快適性があります。新しい希望館は明るく清潔で、また開放的であり、子どもたちは視覚的な温かさとともに「自分は大事にされている」ということを感じ取りやすくなりました。またもうひとつの大きな変化に、生活の場を区切る境界ができたことがあります。新舎では各ユニットが別々の玄関を持ち、それぞれの居住空間が独立することで、生活に安定感が生まれました。さらに旧舎では複数名の子どもがひとつの居室を共有していましたが、新舎では全ての子に個室が用意され、自分だけのプライベートな場所を持てるようになりました。

その結果として、まず子どもたちの生活する場所が、子どもたちにとって「帰りたいと思える場所」になりました。以前は日常的に生じていた深夜の無断外出も、建替え後は見られなくなりました。また、子どもたち（とくに女子）が自分の居室を思い思いに飾る様子が見られるようになりました。つまり、生活の場が子どもたちの「居場所」になりました。そして、同じ生活の場を共有するメンバー同士でも一体感が生まれ、子どもたちは自然とリビングに集まってきては同じ時間を共有するようになりました。

もうひとつ、今回の建替えでは職員の子どもの関わりにも、大きな変化が生じました。子どもたちが共有スペースに出てきやすくなったのに加え、新舎では職員がキッチンに立っていても、職員居室にいても、ユニット全体の様子を見渡せるようになり、子どもの様子が把握しやすくなりました。そのため職員は、そのつど適切な距離感を図りながら子どもに関わることで、子どもと関係性を築ける機会がより多く持てるようになってい

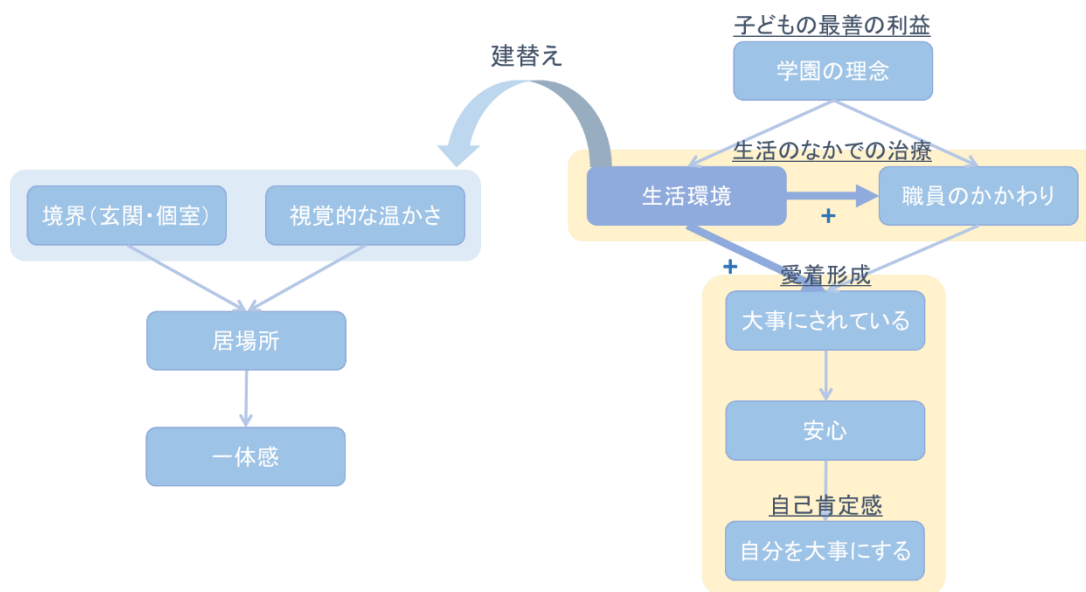


図 3. 建替えの影響 (希望館)

※インタビューをもとに Living in Peace 作成

■職員の思い (『鳥取こども学園便り』より)

希望館の建替えから二年半が過ぎ、日々子どもたちに関わっている希望館の職員の今の思いを、学園誌『鳥取こども学園便り』から許可を得て一部抜粋して紹介します。(希望館では生活ユニットのことを「ホーム」と呼んでいます。)

～新しいのぎく～

のぎくホーム 松本 光世

現在のぎくホームにいる子で古い希望館を知っている子は三人います。そのうちの一人が新しい希望館になって嬉しいことを書いてくれました。「私が、新しい希望館になって嬉しかったことは、各部屋が広がったことです。前はリビングも狭くて、使いづらかったけど、今は広々していてみんなで遊んだり、ダンスをすることもできます。あと、今の希望館は色々な工夫がしてあります。夜は廊下の下の方に人が通るとライトがつきます。だから夜、トイレに起きても怖くありません。台所は、カウンターキッチンになったので、料理をしている大人と会話ができます。子ども同士も大人とも会話が増えて嬉しいです！」(中1女子)。子どもが快適に生活し、喜んでいるのが嬉しいです。これからも大切に使って、外見だけではなく、中身も良いホームにしていけるよう子ども達と一緒に笑ったり泣いたりしながらやっていこうと思います。

～若葉から樹木へ～

わかばホーム 門脇 弘道

改築前の希望館を知らない子どもが半数を超えました。新しい建物で快適に過ごせることが当たり前になっているわかばっ子を見ることも当たり前となってきました。落ち着いて過ごすことで学校や社会で生き活きと頑張っているわかばっ子達は力強く、素晴らしいと改めて感じています。

わかばっ子達は、リビングでテレビを観て、ベッドでマンガを読み、ゴロゴロダラダラと過ごしています。職員が「宿題しなさい。」「お風呂入ってよ。」と言っても「は～い。」と返事をするのみでなかなか動きません。三〇分以上ゴロゴロ。相当、居心地が良いのでしょう。ただ、朝になるとしっかり起き、「行ってきます。」と登校します。学校ではとても頑張っています。ホームで充電が満タンなのでしょう。

改築前の希望館が悪かったわけではありません。古く不便な部分もありましたが、子ども達と職員が協力し合って生活をしていました。便利さが子どもの成長に繋がるのではなく、子どもの居場所として心地良さが成長に繋がるのだと思います。今の心地良さは最高です。わかばっ子達は、ホームで心地よく過ごし、学校や社会に揉まれながら、グングン成長し樹木に近づいています。